

紹介

宋代財政史

曾我部靜雄著

本書は著者が、昭和二年京都帝國大學史學科卒業論文として「宋代の饑饉救済策を提出して以來十數年間、支那經濟史を專攻し、史林、文化、東亞經濟研究等の誌上に發表したる諸成果を纏めて世に問ふたものである。

全書篇を分つこと三。第一編宋代の財政一般は總論に當るものであり、先づ宋代賦稅制度の概要を述べ、北宋より南宋に至る財政狀態の推移を説き、當時の財政統計の資料たる會計録を説明し、別に宋代財政の一特長をなす帝室特別會計たる内庫の制と、地方稅の性質とを論じ、最後に人民の負擔が唐以前に比し、著しく過重なりしことを以て結び、その理由を、宋代財政が常に、戰時財政でありしことに歸してゐる。

第二編宋代の役法は元來人民の金錢的負擔ではなかつた職役の制度が次第に物質的負擔となり、更に之が合理化されて役錢となり、一種の附加稅的性質を帯びる課稅となると共に、又別種の名目で役が復活されゆく變遷を論じたもので、王安石の募役法が中心となつてゐる。役法は本來の性質上は財政の中に含まれぬものであるが、亦宋代の財政を説くに當つて無視することの出來ぬも

のがあるから、特別に編を立て、論じたのであらう。

第三編特殊問題は數個の論文集であり、主として南宋時代に關するものである。宋代を説く者、常に北宋に密にして南宋に疎なるは正に著者の言ふ通りであるから、南宋の社會經濟を攻究せんとする者には好箇の指針を與へることにならう。第一章月椿錢の研究は南宋時代に入りて發生したる戰時附加稅の重要な項目、月椿錢に就いて論じたるもの、第二章南宋の紙幣は、最もよく時代の特色を現はす當時の紙幣たる交子、會子等を取扱へるもので、蓋し研究者にとつては最大の難物であると共に、それ丈興味深き問題でもある。第三章南宋の和買絹及び折帛錢の研究は、もと政府の惠民政策より出で農民に金融の便を計りたる和買法が次第に變化して農民搾取に墮し、折帛錢なる附加稅と變化したる經緯を論じ、第四章宋代の身丁錢と戸口數問題は、主として南宋時代に問題化せる人頭稅たる身丁錢を研究の對象とし、身丁錢賦課の基準について必然的に聯關して來る宋代の戸口統計の性質に説き及んでゐる。この戸口統計の問題については實は評者も些か關係あり、嘗て愚考を著して幸に著者からも賛同を受けるの光榮を得たが、此處では深入りすることを遠慮しよう。第五章宋代の雜徭は、先の職役と共に人民の政府に對する金錢以外の負擔たりし夫役の制を論じたもので、嘗て文化誌上に發表された一篇で、北京近代科學圖書館々報に漢譯して掲載されたことがある。第六章宋代の官戸と限田問題は、宋代士大夫階級の勃興に伴ひて、新たな意義を附加せられたる官戸の土地兼併問題を取扱つてゐる。

思ふに支那經濟史の研究は最も必要なことを感ぜられ乍ら、その研究は同時に最も困難なことであり、實際に従事した者のみが體驗し得る。決して彼の西洋の書物等によつて手取早く支那通にならうとする人達の知る所ではない。この點著者が支那經濟史研究に志し、先づ廣く根本史料を探索し、新出の宋會要、四庫全書珍本叢刊等の資料を購使し、或は靜嘉堂文庫の秘籍を探り、最近には又遠く滿洲に赴いて四庫全書の未刊本を涉覽せる努力は多とすに足る。而して經濟史への道徑として宋代財政史に着目したのも亦贊成である。蓋し宋代は支那經濟史上の一大轉換期に當り、近代の社會組織が固定したる時期である。又支那の經濟問題は財政上の必要によつて論議され、經濟記事は財政を中心として輯録されてゐるから財政を無視しては、經濟一般を論ずるに一步も前進出來ぬのである。著者の努力は醫學に於ける基礎解剖學にも比す可く、混沌として無秩序に積み上げられたる舊籍の中より、先づ財政の骨格や血脉を迎つたものであつて、何人も疑ふ可からざる結果に到達したる點に於いて筆を止めてゐる。それ以外の假説に類する範圍に至つては、著者の目的とする所ではないであらう。

現時我國は恰も宋代の如き非常時下にあり、たとへば事變が終了しても、世界の趨勢は我國をして直ちに平時財政への早急な復歸を許すまいから、此書を熟讀玩味せば、今後の時局財政に對しても重要な示唆を與へらる可きを疑はない。只財政には常に財政上の術語あり、一般人に難解なものであるが、特に支那に於いて甚しとする。之を正確に今日の國語に翻譯することは殆ど不可能

であつて、本書も恐らく一般讀者にとつては著しく難解な點があるかも知れない。併し忠實な讀者には卷末の便利な索引がその困難を救ふに役立つであらうと信ずる。

さはれ宋代財政上の問題は本書に盡きてゐる譯ではない。當に大いに論ず可くして、説いて詳かならざるものがあり、課利、即ち賦税に對立する專賣制度の如きがその例であり、父子に關聯しては銅錢及び金銀の問題が併せ考察する可きであらう。尤も此等の問題に關しては、著者の意或は、既に他に其人あり、論者の公にされたるものもあれば、之と重複するを避くるにあつたと思はれるが、亦著者獨目の見解もある筈で、現に本書に包含されざる論文も既に發表されてゐるのである。宋代財政史續編の出現を待望する所以である。(菊判四六二頁、索引九頁、定價五圓、生活社刊)(宮崎市定)

結城宗廣

結城宗廣事蹟顯彰會發行

昭和十三年は吉野朝隨一の忠臣結城宗廣卿戰死してより滿六百年に相當するので、其の盡忠事蹟を顯彰せんとして、結城宗廣事蹟顯彰會が組織せられ、其の一つとして、この「結城宗廣」なる廣澤なる傳記が刊行された。

本書の前編「結城宗廣」は結城氏の故地白河にありて久しく郷土史の研究に没頭精進して居られる深谷賢太郎氏の筆に成るもので、宗廣卿の事蹟を微に入り細を穿ち、未だ嘗て見ざる精細なる